

難民の故郷の味を学食に—「Meal for Refugee」 和泉・中野で開催 1食につき20円が難民支援に



食べて知って！ 難民のこと (中央が田村さん)

難民への関心・理解を学生に深めてもらうため、難民の故郷の味を学生食堂のメニューに導入する取り組み「Meal for Refugee (M4R)」が5月から6月にかけて、和泉・中野両キャンパスの学生食堂で行われている。

「M4R」は、認定NPO法人・難民支援協会(JAR)が、日本で暮らす難民とともに作った料理レシピ本「海を渡った故郷の味 Flavors Without Borders」から生まれた社会貢献プロジェクト。今回の明大での活動は、本学も会場になった昨年の難民映画祭(国連難民高等弁務官駐日事務所主催)にボランティアスタッフとして関わった明大生有志が、難民支援協会の協力を得て

実現させた。

和泉の学食では5月19日～30日と6月16日～27日(土を除く)、中野では6月16日～20日に実施され、期間中に合わせて6つの国・民族の料理を提供。日本で暮らす難民の支援のため、1食につき20円が寄付される。

和泉の第1週目(5月19日～23日)には、「きな粉入りビルマ風サ

ラダうどん+タピオカとサツマイモのデザート」(ビルマ)が登場。スパイシーなうどんと甘いデザートが絶妙にマッチする味わいで、多くの学生が注文していた。

「M4R」明治大学代表の田村杏奈さん(法3)は「“食”という身近なものを通じて、難民の方々が日本にもいることなど、現状を知ってもらえれば」と話している。



和泉で提供された「きな粉入りビルマ風サラダうどん」



学食内には難民に関する啓発の掲示も

M-Naviプログラム「太田姫稻荷神社～神輿を担ごう～」 学生23人が参加 神輿を通じて地元の人たちと一体に



みんなで担いで「ワッショイ & ピース！」

学生支援部は5月11日の日曜、駿河台キャンパスの近くにある太田姫稻荷神社(東京都千代田区)の例大祭に合わせ、「太田姫稻荷神社～神輿を担ごう～」と題するM-Naviプログラム(正課外教育プログラム)を開催した。

当日は1～4年の学生23人が参加。地元町会から貸与された半纏に袖を通した学生たちは、最初こそ祭の迫力にやや圧倒されていた様子だったが、徐々に雰囲気にも慣れ、町会の方たちと元気いっぱい神輿を担いでいた。

杉山和志さん(政経2)は「生まれて初めて神輿を担いだけど、みんなで声を出す一体感が最高でした」と笑顔で話していた。



リビティタワーの目の前を通過する神輿

復興への願い込め 福島県飯舘村の農地に桜を植樹

いまなお避難生活が続く福島県飯舘村で4月、農学部の学生が桜の植樹を行った。植樹を行った場所は、昨年10月に食料環境政策学科環境社会学研究室(市田知子教授)が、フィールドワークのために訪問した同村小宮の農家、大久保金一さんの農地の一角である。

大久保さんは若い学生たちの

訪問に勇気づけられ、小宮のかつての地名にちなんで「マキバナハナヅノ」計画を思い立った。冬は深い雪に覆われる同地では、春先には草花が一斉に芽吹く。いま苗木を植えれば、何年か後には一面に桜が咲き乱れることだろう。「マキバナハナヅノ」にはそうした思いが込められている。

当日はNPO法人「ふくしま再生の会」の準備の下、農学科土地資源学研究室(登尾浩助教授)、同地域環境計画研究室(服部俊宏専任講師)、東京大学ほか他大学の教員、学生とともに大勢で植樹を行った。天候に恵まれ、普段は静かな山間に賑やかな声が響いた。



復興への願いを込め、植樹をする学生たち

第2回 被災地とところをつなぐ 東日本大震災の風化を防ぐフォーラム

～福島県沿岸の町「新地町」の取り組みと首都圏のわたしたちができること～

日時 2014年6月14日(土) 13時30分開始
(13時開場、16時閉会予定)

参加費無料
(定員300人)

会場 明治大学駿河台キャンパス
リビティタワー1階リビティホール
(東京都千代田区神田駿河台、JR御茶ノ水駅より徒歩3分)

主催 東日本大震災の風化を防ぐプログラム実行委員会
共催 公益財団法人東京YWCA / 明治大学震災復興支援センター
協力 公益財団法人日本YWCA
問合せ 公益財団法人東京YWCA 被災者支援プロジェクト
☎03-3293-5421